



潔癖
わんこの

しつけ方

《番外編》

Illust.Kyo Kitazawa

北沢きょう

Nosuke Inui

犬居のすけ

この作品は（株）心交社に帰属します。
無断複写・複製・転載を禁じます。

『ね、茅野さんお願い……もう少しだけ』

大の男にあんな甘ったれた声を出されて、可愛いと感じるのだから俺もた
いがい病気だと思う。

『茅野さんの中にいるって思うとすごく興奮します。もっと奥まで入れたら
いいのに……』

わざわざそんなことを言う比奈木に腹を立てても、その顔が幸せそうに笑
み崩れているのに気付いてしまうと、自分の恥ずかしさなどどうでもよく
なってしまう。

比奈木は可愛い。

俺に懐なついている時が一番、可愛い。

あいつに甘えられるとなんだって許してやりたいと思ってしまう。

だから自分のこの気持ちは正直予想外だった。

俺があいつを甘やかしてやっているんだと思っていた。けど、あいつに甘
えられて俺にも満たされてる部分があったんだと会えなくなつて初めて思い
知らされた。

比奈木に会えなくなつてそろそろひと月が経とうとしている。

たかがひと月、されどひと月だ。

大人しく待つてゐるなんて言つておきながら、まさか自分の方が先に音を上げそうになるとは思わなかつた。

「あゝゝゝくそつ、わんこ撫でてえ……」

職場のデスクに突つ伏して低く唸ると「あれ、茅野さん犬派でしたっけ？」と同じ部の後輩が話しかけてきた。

時刻は夜の八時過ぎ、事務所の立ち上げのせいで俺もこの後輩も残業が続いている。

「撫でて癒いやされるなら猫のがよくないっすか？ 犬みたいにうるさくないし柔らかいし」

分かつたような言葉は鼻で笑い飛ばしてやった。

「いーや断然犬だね。でかいナリして尻尾振つてキュンキュン鼻鳴らして甘えてくんのが可愛いんだろ。あゝわんこ構いてえ。思う存分甘やかしてえ」やさぐれた気持ちでそうぼやいていると、背後から艶つやのある低音が話に混

ざつてきた。

「もうやめてよね、職場で惚気のろけとか」

振り向くと帰り支度を済ませた伊勢いせが呆れたように俺を見下ろしていた。惚気という言葉に不思議そうな顔になった後輩を見て、慌てて伊勢に止めろ、と伝える。

しれっとした顔の伊勢は制止も気にせず続きを口にした。

「だってちーちゃんの言うわんこってあの子でしょ？ あの潔癖症けっぺきしょうの……」

「え、茅野さん犬飼ってたんですか？ 茅野さんって確か社員寮ですよ」
後輩のつつこみに舌打ちしたいのを辛からうじて堪こらえる。

「あー……実家だよ、実家で飼いだめたやつ。休みがなくて最近会いに行けてねえから」

ごまかしながら伊勢を睨にらみつけると、ふふん、と嫌みな感じで笑われる。

「恰好かつこうつけてないで顔だけでも見に行けばいいのに。どーせあいつのためにならないとか偉偉そうなこと考えてるんでしょ」

「うるせえよ」

言われた内容が凶星すぎてそうとしか返せない。

確かに、忙しくなると分かって最初に浮かんだのはいい機会かもしれないという考えだった。

比奈木が甘えてくるのが、はつきり言っただけ俺は嬉しい。

だけど仮にも年上である俺が、まだ社会にも出ていない世間知らずを甘やかすすぎて、あいつをダメにしたくなかった。

ただでさえちゃんとしていけるのか心配なところの多い奴なのだ。俺がしっかり加減を教えてやらないと、なんて。

「ま、さすがに今週過ぎたら落ち着くんでしようし頑張って」

そう言うのと部署の違う伊勢はひらり、と手を振って先に帰っていった。

後輩は不可解そうな顔をしながら「潔癖症の犬なんているんすね」などと呟いて作業に戻った。

「あー疲れた」

スーツの上着を脱ぎ捨ててベッドに体を投げ出すと、冷えたシーツの感触をなんだかしめつぽく感じて鼻に皺しわがよる。

仕事を終えて、遅くまで開いている定食屋に寄って帰ればもう日付を越える時刻だ。

風呂に入るか迷いながら、どうせなら比奈木の家のベッドで寝たいな、なんて思う。

あいつの家は清潔で、いつもなんだかいい匂いがする。

とってつけたような作り物の香りじゃない、もしかしたら比奈木本人の匂いなのかも知れない。

シングルに男二人は狭く苦しくて仕方ないけれど、それでも背中から比奈木に抱きしめられながら、あの嬉しさを滲にじませた声で名前を呼ばれながら眠りたいと思う。

そんなことを考えていたらふと気になって、投げ捨てていた上着から携帯電話を取り出した。

今日も比奈木からのメールはきていない。

忙しさにかまけて何日か返信をさぼっていたら、それ以来連絡が来なくなってしまうた。

悪いことをしたなと思う。

いい子で待ってるなんて言ったから気を遣っているんだろう、とも。

なのに自分でも思いがけない子供っぽい部分が、急に聞き分けよくなつてないでもっと甘えてこい、なんて腹を立てている。

あいつから言っておないと、俺から会いたいなんて言い出しづらいじゃねえか、なんて。

我ながら呆れるほどの傍若無人さだ。ほうじやくぶじん

さすがに少し申し訳なく感じて、フォローのメールでも送ろうかとメールの作成画面を開いて、けれどすぐに諦めてベッドに携帯を放る。

自分の都合で待たせているのに、途中で会いたいなんて言えるはずもない。「けど、会いてえな……」

声に出してみたらもつとあのわんこの顔が見たくなってしまうた。

茅野さん茅野さんと飽きずに何度も人の名前を呼んで、いつだって好意を

隠そうともせずこちらを見つめてきて。

比奈木にされることは男としては不本意なことも多いのに、あいつの求めに応じることにはひどく満たされてしまう。

これまでこういう感覚とはあまり縁がなく生きてきた。

こんなべたついた関係になった相手はいなかったし、だからこそ自分は淡泊なのだとも思い込んできた。

けれど、比奈木に対してだけは違う。

『茅野さん……』

目を閉じて比奈木の声を思い出す。

呼んでいるうちにすぐに熱っぽい欲の混じったものに変わる声を。

ああ、そうか。

あの潔癖で人と距離をとりたがる比奈木が、もっと深く触れ合いたいと欲望を丸出しにして見せるのが、俺は嬉しいんだ。

今すぐに触れられたいと思った。比奈木の呼吸をすぐ近くで聞いて、体を開かれて繋がりたい、と。

「比、奈木……」

あいつの大きな手が、肌をなぞる感触を思い出す。

もっともつとと中に入りこんできて、それだけじゃ足りない熱くなった体でぴったりと抱き着いてくるのを。

深く口づけて、息継ぎの間まで惜しむように俺の名前を呼んでくるのを。ぞくり、と背中が震えた。

「……あー、……くそっ」

もぞもぞとベッドの上で身じろぎしてみてもごまかせない。俺の下腹部はとつくに反応を始めてしまっている。

仕方なく服を乱して手を差し込むと、予想よりずっと熱をもった自分が指先に触れた。

あの馬鹿わんこ、とつとと音を上げて甘えてくりゃいいのに。

そうしたら今すぐにでも、あいつに会いに行けるのに。



「比奈木、おすわり」

言葉を聞いた比奈木は一瞬驚いた顔をして、ただと言われるまま大人しく俺の座るソファの隣に腰をおろした。

そうしてこれでいいのかと窺ってくる姿に満足して、比奈木の頭を無理やり抱え込む。

「え？　ち、茅野さん？」

「いいから、ちよつとじつとしてろ」

途端、比奈木がぴたりと体の動きを止める。

あまりの素直さにわしわしと比奈木の髪を撫でると、困ってしまったのか比奈木がくう、と情けない音で喉を鳴らした。

仕事が落ち着き、俺はまた連日のように比奈木の家に入り浸るようになっていた。

比奈木に引き留められてもできる限り応じるようにしている。我慢させるのも我慢するのもなんだか面倒臭くなってしまったからだ。

会いたい時に会っていて何が悪いのか。

それで比奈木がダメになるなら、その時はまた責任とってリハビリでも何でも付き合ってやればいい。どうして会う時間を減らそうなんて思っていたのか、今となってはよく分からない。

「あの……茅野さん？」

何も言わない俺に疑問を持ったのか、比奈木が小さな声で呼びかけてくる。それでも離してやる気になれずに頭を撫で続けると、諦めたのか比奈木の体から力が抜けた。

俺の肩に額を乗せて、好きにしてくださいとばかりに。

この瞬間がたまらない。

もつと他の部分にも触れなくなる。

意外とがっしりしている肩や、綺麗に浮いた肩甲骨けんこうこつなんか。

比奈木がすぐになががつくからなかなかゆっくり見られないけど、俺はこいつのバランスの取れた体つきを結構気に入っている。

「やっぱ、わんこ撫でてると癒されるな」

ふいに湧いてきた劣情れつじょうをごまかすように呟くと、比奈木が、はは、と笑った。

「茅野さんっておれのこと、たまに本気で犬扱いしますよね」

「いいだろ、犬、好きなんだから。お前撫でてると大抵のストレスはどっかふっ飛ぶ気がするわ。和む」

「おれとしては、少しくらいはドキドキしてほしいんですけど」

比奈木が落ち込んだようなため息をつく。

その反応で、瞬時に自分が不機嫌になるのを感じた。

こいつにドキドキなんていつだってしている。現に今だって、さらさらとした髪の間隙から覗く白い項うなじがやけに綺麗に見えて、ドキドキ——というか、ぶっちゃけムラムラしているっていうのに。

腹が立つな、という気持ちと、もつと触れたいという気持ちが体を動かした。目の前にある比奈木の首筋にがぶりと噛みつく。

うひゃあと変な声を出して、驚いた比奈木が逃げようとするのを、服を掴んで逃がさないようにした。そのまま舐めたり噛んだりして苛立ちを宥めて

いると、顔を赤くした比奈木が強引に俺の腕からもがき出る。どうやら煽られたらしい様子を見て少しだけ溜飲りゆういんを下げた。

「なんなんですか急に、ほんと茅野さんって性質悪い……」

「なにがだよ。ちゃんとムラムラするぞって行動で示したただけだろ？」
むくれた顔の比奈木が言い返してくる。

「ム、ムラムラじゃなくてドキドキって言ったんですよ！」

「んなの似たようなもんじゃねえか」

「似ててもなんか違うんですって。過程が重要っていうか、情緒の問題って
いうか——」

こいつのこういう細かいところはたまに面倒くさい。

面倒くさいけど、まあそこも可愛いと言えなくはない。反論したくせにこちらの言葉の意味が浸透したのか、徐々に表情に期待が混じり始めた。

この素直さがあるから色々許してやりたくなる。

「あの、おれにムラムラするって本当ですか……?」

そう言ってじつとこちらを見る表情にそそられる。

「……会えない間、お前で抜くくらいには、本当」

顔を見られたくなくて唇を寄せ、軽く啄むついはように何度もキスすることでごまかした。

「ち、のさん……ね、それってどういう——ちよ、話させてくださいって」
たぶん比奈木はちゃんと言葉にしてほしいんだろうと思う。

お前が好きだからとか、お前としたかったとか。

だけどそんなこと改めて口に出すのは照れくさいから、代わりに口づけを深くすることで誘いをかける。

まんまと体温をあげて俺を押し倒す比奈木に、自然と口元が笑うのを感じた。

見下ろしてくる比奈木の表情がやけに色っぽく見える。こういうスイツチの入った顔も悪くない。生意気で可愛いと思う。

「なあ、お前は？俺で抜いたりすんの？」

「そりやしますけど……それよりやっぱり、本物の茅野さんに触りたいです」

「そうだな、俺も」

それだけ言っただけで様子を窺っていると比奈木が唇を尖らせた。

分からないふりで「どうした？」と訊くと、観念した比奈木が口を開く。

「茅野さん……したいです。このまましてもいいですか？」

欲求に素直なのがこいつのいいところだ。

「いーよ。俺もお前に触りたい」

覆いかぶさってくる重さがしっくりと体になじむ。

もつと直に触れたいと比奈木の服に手をのばした。

脱がし合って重なった裸の胸が、競うように速く高鳴っていた。

終わり